

# 中古消防車・救急車援助事業報告書

平成 17 年度

ーパラグアイ共和国ー  
アマンパイ日本人会



1971 年の日本製ポンプ車で現地にて水槽を取り付けたもの。現在も活躍中です。

平成 18 年 11 月

社団法人 日本外交協会

## 1. 本事業の趣旨

日本において、救急自動車・消防自動車・塵芥収集車といった特殊自動車は、自治体の管理下で所有・利用され、一定期間の後に廃棄される。ただし、処分直前までは予備車として、各消防本部や各自治体にて整備された状態で保管されているのが通常である。日本国内で使用し続けることが困難になった中古車両でも、使用中の保管・整備が徹底されているため状態は良く、このような車輛が不足している開発途上国からは、ぜひ使用したいという要請が多い。

社団法人日本外交協会では、各自治体やその消防本部に対して、車両廃棄予定を調査の上、要請条件に合うものを譲渡していただけるよう、協力を依頼している。譲渡を受けた車両は、引き取り、整備・修理、輸送の手配等を日本外交協会の責任において行い、要請のあった途上国に送り届けることになる。その際には、外務省と協議しながら、政府開発援助（ODA）の中の「リサイクル草の根無償資金協力」を利用し、その後5年間程度は使用してもらえるような状態で現地へ搬送している。

## 2. 要請団体

パラグアイ共和国：アマンバイ日本人会

([http://federacion.hp.infoseek.co.jp/asociacion/amambay/aso\\_amambay.html](http://federacion.hp.infoseek.co.jp/asociacion/amambay/aso_amambay.html))

## 3. 供出団体

東御市

## 4. 譲与車輛

消防ポンプ車（4WD）：いすゞ NKS58G-7104498 1991年

## 5. 実施の経緯

### <要請の背景>

パラグアイ共和国での消防組織・活動は企業献金や個人からの募金、それぞれの組織が行う集金活動などの資金を基に民間のボランティアの消防隊員（交代勤務）により行われている。また、消防・救急を管轄する省庁がないため、緊急車輛を購入する予算はなく、車輛配備は各国の援助に頼っているのが現状である。

2004年8月に首都のスーパーマーケットで大火災が発生し1000名以上が死傷する事件が起こった。緊急車輛の不足、患者の搬送や消火活動に迅速に対応できないことが多いという実態が浮き彫りになり、救急・消防サービスを改善することが早急に求められた。

今回の車輛は、パラグアイで暮らす日系人が組織するアマンバイ日本人会を通じ地域の消防隊へ無償で貸与される。アマンバイ県は、パラグアイ東北部に位置しブラジルとの国境に接している。

<輸送と整備について>

車輛は日本の国内で整備した上で輸出している。内部の装備点検、必要な部品の交換、外装塗り直しに加え、車輛の前面、及び側面には、日本の援助として送ったことを示す援助マークや、交差して並ぶパラグアイ共和国と日本の国旗を貼付した。パラグアイの国旗は、世界でも珍しく、表と裏の違うデザインとなっており、今回は表のみを表示した。

<セレモニーについて>

アマンバイでは2006年5月21日に入植50周年の式典が開かれ、その際に消防車の引渡式が行われた。アマンバイ日本人会の原本功会長、パラグアイ日本人会連合会の前原弘道副会長、ロベルト・アセベト・アマンバイ県知事、ペドロ・フアン・カバリェロ市長、地元関係者、首都からは日本大使館の飯野建郎・特命全権大使および担当者、斎藤寛志・JICAパラグアイ所長、また日本・ブラジルなど国外から約500名が出席した。

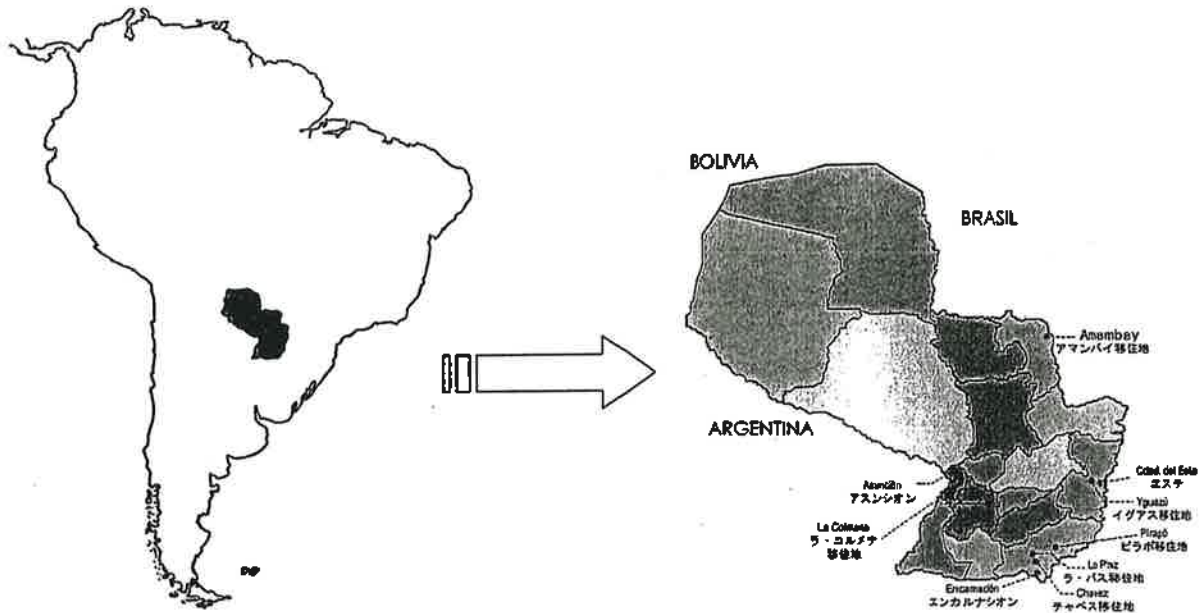
6. 輸送日程

平成17年10月	在パラグアイ日本大使館より4WDの消防ポンプ車申請がある旨の連絡が当協会に入る。
11月 12月	車輛の選定・調整、輸送費見積り調査、「草の根無償資金協力」の申請手続き等
平成18年1月	アマンバイ日本人会と、日本大使館と「草の根無償資金協力」供与契約署名。
2月	アマンバイ日本人会と、日本外交協会の間で、車輛譲渡に関する合意文書交換。
3月3日	横浜港より出港—消防ポンプ車
4月下旬	通関手続き車輛引取完了
5月21日	車輛引渡式

— 別添資料 —

- ・ 【地図】パラグアイ共和国
- ・ パラグアイ共和国 基本情報
- ・ 写真: 引渡しセレモニー当日の様子
- ・ インターネット上に出ている関連記事

—資料【地図】—  
パラグアイ共和国



パラグアイ共和国 —基本情報—

(出典:外務省 HP)

1.面積	40万6,752km <sup>2</sup> (日本の約1.1倍)
2.人口	607万人(2004年ECLAC)
3.首都	アスンシオン(人口約50万人)
4.人種	混血(白人と先住民)97%、欧州系2%、その他1%
5.言語	スペイン語、グアラニー語(ともに公用語)
6.宗教	主にカトリック(信教の自由は憲法で保障)
1.主要産業	農牧業(綿花、大豆)牧畜業(食肉)、林業
2.GNI	67.52億ドル(2004年、世銀)
3.一人当たりGNI	1,170ドル(2004年、ECLAC)
4.経済成長率	2.8%(2004年、ECLAC)
6.失業率	12.4%(2004年、国立統計局)
8.主要貿易品目	(1)輸出 大豆(世界第4位)、綿花、肉類、木材 (2)輸入 機械、原油・燃料、輸送機械、飲料・タバコ
9.主要貿易相手国	(1)輸出 ブラジル、アルゼンチン、チリ (2)輸入 ブラジル、米国、アルゼンチン
1.我が国の援助実績 (05年度までの累計)	(1)有償資金協力 1,334.6億円 (2)無償資金協力 277.6億円 (3)技術協力実績 736.5億円
2.主要援助国 (2003年DAC諸国二国間援助)	(1)日本(20.2百万ドル)(2)米(12.2百万ドル)(3)スペイン(11.7百万ドル) 1976年以来、二国間援助で日本が最大の援助国。

## 引渡式写真

今回のセレモニーでは、日本からお贈りした中古消防ポンプ車1台を、パラグアイ共和国のアマンバイ日本人会へ引き渡されました。車輦は日本の自治体から無償で頂き、その整備・輸送にかかる費用は、日本政府の「草の根無償資金協力」(政府開発援助の一つ)の支援を受け、日本の人々の善意に支えられた国際協力となっています。

平成 18 年 5 月 21 日 アマンバイ日本人会館で入植50周年記念式典が開かれ、その中で引渡式が行われました。

1	寄贈した車輦	
2	引渡式と共に入隊式も行われました。  新しく研修を受け入隊することになった ボランティア消防隊員達	
3	新入消防隊員へ放水の洗礼	

『ニッケイ新聞』

コロニア ニッケイ社会ニュース

■アマンバイが入植五十周年＝パラグアイ＝国内外から 500 人が集う＝伯国からも出席、同船会も

2006 年 6 月 28 日(水)

パラグアイのアマンバイ移住地が今年入植五十周年を迎え、去る五月二十一日、ペドロ・ファン・カバリエロ市のアマンバイ日本人会館で記念式典が行われた。同国日本人移住の中で唯一、コーヒー園の雇用農として入植が進められたアマンバイ。耕地の倒産、農業への移行、退耕など幾多の苦難を経て、五十年の歴史を刻んできた。式典には各地から約五百人が出席、半世紀の歩みに思いをはせた。

アマンバイへの日本人入植は、米国人クラレンセ・ジョンソン氏が経営するCAFE耕地の雇用農として始まる。第一陣三十六家族二百六十人が、サントスからソロカバナ線を経て国境の町ポンタポランに到着したのが五六年五月二十三日。以後五八年まで八次にわたり同地への入植が続いた。

「コーヒー園の管理のため」移住してきたアマンバイ入植者だったが、現実とは異なるものだった。移住地の二十五周年記念誌によれば、雇用農は「ブラジルの奴隷解放によりコーヒー農園の奴隷に代わるべきものとして導入されたもので、労働条件や待遇は厳しいものだった」とある。

パスポートは取り上げられ、各耕地の門には施錠をされ、監督の見張りがあったりと、移住者の自由は拘束された状態だった。さらに五九年にはCAFE社が倒産。農業に転じた移住者に対して海外移住振興会社から融資も行われたが、移住者の約六割が退耕したという。

二十一日の記念式典には国内各地をはじめ、日本、ブラジルなど国外から約五百人が参集。アマンバイ県知事、ペドロ・ファン・カバリエロ市長など地元関係者、飯野建郎駐パラグアイ大使、斎藤寛志JICAパラグアイ所長など日本政府機関代表のほか、国内日系団体から多くの来賓が訪れた。

午前八時半から戦没者追悼の慰霊祭。飯野大使や斎藤JICA所長、パラグアイ日本人会連合会の前原弘道副会長が、三百六十人の先人に追悼の辞を述べた。

五十周年記念碑を除幕。続いて開かれた記念式典でロベルト・アセベト・アマンバイ県知事は「日系移住者の勤勉さ、類まれなる努力とともにアマンバイ県は発展してきた」とあいさつ、日本人移住者の功績を称えた。

式典では八十歳以上の高齢者の表彰式も行われ、日本人会の原本功会長から感謝状が渡された。消防車の供与式も行われ、飯野大使より日本人会を通じて同市の消防隊長に贈られた。

正午からは記念の祝賀会が開かれ、アマンバイ日本学校生徒による合唱や舞踊部の踊りが披露された。

もどる

Copyright 2006 Nikkey Shimbun (Jornal do Nikkey)

## 『ニッケイ新聞』

JICA青年ボランティア リレーエッセイ＝最前線から

■連載(51)＝豊倉麗子＝アマンバイ日本人会(パラグアイ)＝移住の歴史を後世に

2006年7月20日(木)

「国境」というからにはもう少しものものしくてもよさそうなのに、ここほど親しまれている国境はないだろう。セントロの通りの一つが国境である。行き来にまったく制限はない。通勤や通学、買い物などで人々は日に何度となく国境をまたぐ。

私の財布には常にグアラニーとリアルが入っていて、初めこそとまどったが、今ではほかの町に行ったときも支払いにリアルを混ぜてしまいそうになる。

スペイン語とポルトガル語とグアラニー語が使われていて、約三百人の日系人は日本語も話すので四カ国語が混ざった会話になることもある。

日本語学校はパラグアイにあるが、ブラジルから通ってくる生徒も多い。生徒の多くは日系三世で、彼らの祖父母が五十年前、日本からパラグアイにやってきた一世である。

今年五月、ここアマンバイ移住地入植五十周年記念祭が行われた。在パラグアイ日本大使や領事、アマンバイ県知事などをお迎えし、五十年という節目にふさわしい盛大な式典が開かれた。

パラグアイやブラジルのみならず、日本からこの日のために訪れた参加者もいて、数十年ぶりに同船者が顔を合わせるといふ場面には、移住者の強い絆を感じさせられた。およそ五百人の参加者は、五十年の歩みを振り返り、この地で亡くなった家族や友人を偲び、今後の発展に思いを寄せる貴重な一日となった。

五十年と言うと一世から二世への世代交代の時期である。自ら夢を求めて海を渡り、日本への望郷の思いを胸に言うに言われぬ苦労を重ねてきた一世は少しずつ減っている。

私がきてからの一年半でもすでに七名の方が亡くなった。それでもまだまだ元気で活躍されている方も多い。一世から直接、移住当時の話を聞けるということは大変貴重な体験である。

どの人の人生もそのへんのドラマよりもずっとドラマチックで、語り口調の一つ一つからこれまでの苦労と、それを乗り越えて今の暮らしに至った自信とがにじみでている。ところが一世の孫である私の生徒たちは移住に興味を示さない。彼らにしてみれば、祖父母の苦労と、自分達がここで生まれ育ったことはすぐにはつながらないのだろう。一世にしても孫たちに移住の話をするのはあまりないようだ。伝えたいが今の子供達に昔の苦労は理解できないという気持ち、そしてそれにもまして少しずつ薄れていく日本語が両者の間の壁になっているのかもしれない。

五十年という節目の今、生徒たちに少しでも自分のルーツを知ってもらいたいと思う。一世から直接話を聞ける最後の世代の彼らに、日々日本語を教えながらそんなことを考えている。

◎ ◎

【職種】日本語教師

【出身地】神奈川県川崎市【年齢】33歳